

林農相 諫早開門義務遵守する

林農相 有明海漁民と懇談

2月2日、よみがえれ！有明訴訟原告団・弁護団は、林農林水産大臣、江藤副大臣、農村振興局長、九州農政局長らと佐賀市において、諫早湾干拓受堤防の開門について懇談を行った。

【林農水大臣】高裁判決による開門の期限が今年12月。佐賀県、長崎県の両者の意見に隔たりがある。ただ、今年12月までの開門は法的義務として確定しており遵守しなければならぬ。開門に向けて誠心誠意努力する。



20年休漁 公共料金払えず 有明漁業者訴え

【松永(長崎県諫早市小長井漁協理事・タイラギ漁業者)】タイラギが諫早湾の主漁種だった。これが20年間休漁。今も、排水のたびに赤潮が発生し、被害は現在も続いている。補助事業だけで生活している。公共料金も滞納し、保険料も払えず病院にもいけない。前回の短期開門調査の際は、途端に貝が復活した。効果はすぐに出る。長崎県は反対というが、実際には、現場の漁業者や建設業者も開門して欲しいと思っ

ている。でも、それを言うとは県からの事業を打ち切られるので開門反対と言わざるを得ない。海で漁業をさせて下さい。何とか助けて下さい。自民党がはじめた公共事業ですから、自民党がきちんと後始末をつけるべきです。

【石田(長崎県瑞穂漁協組合長)】堤防締め切り以後、諫早湾の水質は悪化の一途。組合員も激減した。調整池の汚水が排出されるたびに海は悪くなる。瑞穂漁業は、これまで国と県に従ってきたが、全員協議会を開き、全員一致で開門に方向転換した。アサリもない。カキの養殖も3年連続不漁で、今期は昨年の半分。一日も早い開門を。

【松本(長崎県島原市有明漁協組合長)】締め切り後、毎年、漁獲は減少。昨年は、イカが全く取れず、イダコ、マダコも水揚げがない。このような状況下で漁民は一刻も早い開門を望んでいる。短期開門は僅かな開門だったにもかかわらず秋口には回復が見られた。生活が厳しく保険を取り崩している。一日も早く開けてください。

【平方(佐賀有明海漁協大浦支所・タイラギ漁業者)】諫早湾の締め切りで海は激変した。流速が遅くなり、異常な赤潮と貧酸素水塊で、動ける魚はいなくなり、動けない貝類は斃死した。2時間潜ってもタイラギの稚貝は20個しか取れない。成貝は全くいなかった。締め切り以前は、2時間潜れば1000個とれていた。

【川崎(佐賀県川副町・ノリ養殖)】

栄養塩不足で不安でならない。雨が降れば本来は栄養塩が豊かになつて喜ばしいのだが、諫早湾の調整池に雨が降れば、それが排水された時、赤潮が発生させる。締め切り以前は2月半ばでノリ漁を終えていたが、今は4月まで取っている。経費を度外視しても取らなければ来年取れるか分からないので不安で安いノリでもとり続けなければならぬ。これが日本一の佐賀のノリの現状。大臣の就任直後の発言に菅総理の決断を批判するような言葉があつたが、菅総理の決断がなければ、今も、水門を開けるかどうかグダグダしていたはず。12月はノリの最盛期。12月に開けるのは、やめて欲しい。ただ、今は溜まった水を出すだけだから、水門開放で希釈されて排出されるので今よりはマシになる。

【大鍋(佐賀県大浦・ノリ養殖)】これは今朝取れたノリ。6等級。そして明日はもっと悪くなる。

被害は今起っている

研究者訴え

【高橋(熊本保健福祉大学教授)】調整池では、毒性の強いアオコが大発生している。この毒素が有明海全域に広がり蓄積されている。開けたら被害が出るのではなく、被害は今起こっている。